

## 埼玉県機械工学系奨学生レポート 最終レポート かけがえのない経験を振り返って

4月に期末試験を終え、5月はNBOとオハイオ州経済開発局での年間報告プレゼンテーション、オハイオ州知事への表敬訪問、カリフォルニア観光を終え、5月13日に帰国しました。本レポート前半では、5月の活動について報告します。後半は、NBO、フィンドレー大学、またフィンドレーという町で私が約10か月間で学んだこと、私生活の忘れることができない思い出について報告します。

### 帰国前の5月の活動

#### ● オハイオ州知事への表敬訪問とオハイオ州経済開発局でのプレゼンテーション

5月の帰国前はさまざまな最終報告やアパートの片づけに追われバタバタと過ごしました。5月1日にすべての期末試験を終え、翌日の5月2日にオハイオ州知事のケーシック知事へ表敬訪問を行いました。知事は大変お忙しいスケジュールの中で、今回私たちと面会する時間を作って下さり、お会いすることができました。

偉人に会う時はいつも緊張するものですが、アメリカ国内で50州あるうちの1つであるオハイオ州知事に会うということで、今までにない特別な緊張感を味わいました。

面会では、私たちが埼玉県の奨学生としてアメリカに留学し、技術的なことを学ぶためにNBOでインターンシップをしていることなどを話しました。また学校やインターシップ業務内で、「文化や考え方が違う人々が、どのように1つの課題やプロジェクトを共に行うとよりよい結果を産むのか」を学んでいると報告しました。

また知事は日本の情勢についても大変詳しく、「尖閣諸島問題について日本の君たちのような若者はどういう意識を持っているのか？」等の突発的な質問や、「大リーグで活躍する日本人選手が最近多いが、彼らはなぜ活躍できるか？」などさまざまな分野の話をしました。ケーシック知事は私たちの話を本当に真剣な顔つきで聞いていて、私たち日本人の若者の意見に大変興味を示していました。



ケーシック知事との面会(左から川村先生(フィンドレー大学)、曾根君(埼玉県総合系)、ケーシック知事、私、皆川君、シペル先生(フィンドレー大学))

## ● オハイオ州経済開発局でのプレゼンテーション報告

知事との面会後は、オハイオ州経済開発局で私たちのこの10ヶ月間の活動に関する報告をしました。オハイオ州経済開発局とは、オハイオ州に暮らす人々の雇用先を増やす事を目的とし、オハイオ州への企業誘致を推進する部署です。この部署は独立行政法人であり、企業誘致を目的とすることから民間企業との繋がりが非常に強く、NBOでの長期インターンシップでの実習内容や、NBOの事業に対しても、とても関心を持って頂けました。

## ● 大掃除とアパートの立ち退き

毎年、埼玉からの機械工学系の奨学生は、同じアパートに代々暮らしていましたが、来年度からシステムが変わり、異なる場所に住むということで、アパートの立と退きに向けて大掃除を行いました。代々先輩方から受け継がれたアパートだったので、日本の家具(箸や湯呑み等)も揃っていて便利だった反面、長年の留学生活を見守ってきたそのアパートは、歴代でついたであろう汚れもあり、大掃除は一苦勞でした。しかし、近所に住む友達が協力してくれたこともあり、無事大掃除を終えることができました。

また、自分たちが10か月間生活していたアパートの掃除をしていると、去年の8月からそこで過ごした思い出が次々と思い出され、時より涙すら出そうになりました。普段卒業式や冠婚葬祭ですら涙が出ない私ができるようになったので、私自身とても驚きましたが、それほど、このアメリカでの留学生活は凝縮された濃いものであったのだと思います。

## 8月からの生活を振りかえって

### ● フィンドレーでの生活のはじまりと友達づくり

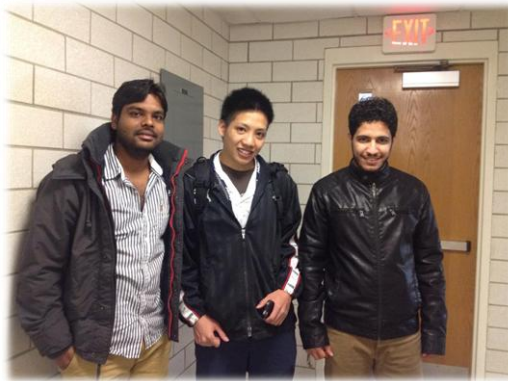
8月11日にオハイオ州トレド空港に到着し、空港からフィンドレーに向かう車の中で、想像以上の田舎の風景に驚き、果たして私はこの場所で10か月間過ごしていけるのか？と不安を抱いたことを覚えています。しかしさっそく翌日から既にいる留学生やアメリカ人学生、新しく到着した留学生などに次々と出会い、あっという間に気づけばたくさんの友達ができいていました。友達ができると、自然とたくさんの情報を得ることができます。アメリカ人の友人から地元のおいしいレストランやアイスクリーム屋を教えてもらったり、他国の留学生から他国の伝統料理や文化、授業に関する事前情報を教えてもらったりと本当にありとあらゆる情報交換をしました。よく就職活動や自己啓発に関する書籍で「人脈づくりが非常に大切である。」という内容を目にすることがありますが、こういった情報収集に対する能力という意味でも人脈づくりが大切なのであろうと身を持って感じました。

## ● フィンドレー大学での英語学習

毎週月曜日、水曜日、金曜日にフィンドレー大学に通い、他国の留学生たちとともに英語を学びました。先生は日本の英語の授業とは、まったく異なるスタイルで授業を進めていくので、当初は困惑したことを記憶しています。先生たちは積極的に学生に尋ねたり、学生通しでディスカッションや討論をさせたりします。特に討論は難しく、最初はインド人のクラスメートからの一方通行で十分に自分の意見を言えないまま論破され、悔しい思いをしました。もっとも自分の意見をスピーディに返答したい！言い返したい！という思いから、アメリカ人の友人に練習相手になってもらい特訓しました。すると後期の授業に入った頃から、徐々に対等な対話ペースで討論ができるようになりました。上手いかなかった時期には、「討論は私にはもはやできないものなのでは？」とまで考えていただけに、何事にも「慣れと成長」というものがあることを学びました。

## ● 日本で話す機会が1度もなかった国の留学生と話して。。。

以前のレポートでも紹介しましたが、フィンドレー大学には世界各国さまざまな国から留学生が集まってきます。そんな中で、サウジアラビア人、ネパール人、モンゴル人の留学生との出会いは、日本にいた時には会う機会も話す機会も1度もありませんでしたので、貴重な思い出になりました。また、サウジアラビア人やモンゴル人留学生は自分と同じ年齢層でも結婚し、子どももあり、その配偶者と子供と共にアメリカで留学生生活を送る学生も多く、とても驚きました。仮に奨学金を受け取りながら日本人が同じことをすれば、もしかしたら問題になるかもしれません。でも彼らの国でそれは問題にはならないそうです。他国の国の人であっても私たちは同じ人間で、同じような感覚を持ち、同じように優しい心や気遣いを持った行為に喜び、同じように悲しいことや辛いことに心を痛めます。しかし時折、考え方や習慣が、彼らの国の歴史的な背景や宗教、文化によって根本的に違うものだということを知りました。また、文化的思考の違いの中でスムーズにコミュニケーションをとるためにも、このことを常に念頭に入れておかなければならないと思います。一言で言えば「異文化理解」ですが、これは非常に深く難しいもので、私もより他国の文化、宗教、習慣のことをなるべく知った上で他国の人と話したいと思うようになりました。そうすること、文化的、宗教的な内容の話において、より内容の濃い、質の高い話ができると思います。



クラスメートとの写真(左からインド人の友達、私、サウジアラビア人の友達)

### ● 日本人駐在員との屋内サッカー大会

11月から始まった屋内サッカーでは、アメリカ人の迫力あるパワープレーに怖がりながらも3月まで駐在員の方々と共に大会を楽しませていただきました。

また、この大会を通して、アメリカ人との出会いだけでなく、他の会社に日本人駐在員として働いている方々と出会うことができました。実際私たち理系の学生は、卒業した後、海外に行く機会といえば出張あるいは駐在の可能性が高いので、他の会社の駐在員とも交流できたのは非常に有意義でした。駐在1年目に仕事で苦労した話や、子どものこちらでの教育の仕方に関する話など、各駐在員の公私の話は私にとって将来を真剣に考えさせてさせてくれる良いきっかけとなりました。

### ● 貴重な長期海外インターンシップを通して

日信工業のアメリカ法人 Nissin Brake Ohio での約10か月間のインターンシップは、私が経験した事の中で1番と言っても過言ではない程、価値のあるものだったと思います。長期留学プログラムや短期海外インターンシップは各大学や他の機関でも取り扱っているため、応募する機会はあるかと思いますが、長期の海外インターンシップのプログラムに行けるチャンスはなかなかありません。また、そのインターンシップ実習の中で設計や環境改善、メンテナンスや翻訳業務など多数の業務に携われたことが大変有意義であったと思います。設計が終わらず、土曜日、日曜日までNBOに行ったのもいい思い出です。また、インターンシップでアメリカ人の考え方と日本人の考え方に共通する部分も多い反面、異なる部分も多々ありました。残業をする頻度は日本人の方が多いというのは有名ですが、アメリカ人が残業しないわけではありません。例えば、エンジニアの上司の一人であるラウールは先日、彼の担当する機械が止まった時に夜まで残って機械の修理をしていました。彼は機械を修理しながら「自分のラインが止まっているのに帰るわけにはいかない。昼間発生したトラブルをナイトシフトに

引き継いではいけない。」と言っていました。この言葉を聞いた時に「アメリカ人は仕事に関して無責任な部分がある。」と以前、駐在員の日本人の方が言っていたのを思い出しました。私は、これは日本人とアメリカ人の責任範囲の考え方の違いであって、決してアメリカ人が無責任なわけではないのでは。。。と感じました。日本では、チームの責任、グループの責任というのは多く存在しますが、アメリカでは個人の責任というのがより多いです。ただ私はどちらのやり方も間違っていないと思うので、どちらが正しい、どちらが間違っているという結論は出せませんでした。しかし、日系企業の現地工場で現地の雇用者と共に仕事をするには、この責任範囲の相違についての理解と融合していく配慮や努力が必要であると強く実感しました。



左からエンジニアの上司であるジェフとジェリーと私

### ● 周りの方々からの支え

私がこの留学を無事終えることができたのは、個人の努力や粘り云々より、周りの方々に支えられていたからだと思います。

本当に出会ったすべての人に感謝の気持ちとお礼を言いたいです。渡航前、渡航期間中にお世話になっていた埼玉県国際課の職員の方々、NBO で常にお世話になっていたキャリアパーオフィスのエンジニアの方々、フィンドレーで生活から学校のことまで公私共にお世話になった川村先生、向かいのアパートに住んでいて、危機的状況で常に助けてくれた上田さん(フィンドレー大学大学院生)、留学に行くことに対して賛成し支援してくれた両親、日本から豚骨ラーメンを送ってくれた私の所属大学の研究室の友達。。。名前を上げはじめるとこのレポートの後半のページをすべて埋め尽くしてしまいそうな程、多くの方々にお世話になりました。本当にありがとうございます。ここでの出会いと経験は決してお金では買えない価値のあるものでした。残り1年半ある大学院生活、就職活動、社会人になってもここでの経験がさまざまなシーンで生きてくると思いますし、必ず活かしたいと思います。最後に私のレポートを読んでもらった方々、留学中に会ったすべての人々に重ねてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。